

「姨捨」小論

——堀辰雄の歴史小説における女性像——

山本裕一

一 はじめに

堀辰雄の文学において、その歴史小説の占める位置はきわめて重要である。

一作目の「かげろふの日記」（昭和十二年十二月『改造』）は、堀が『風立ちぬ』①の終章を書きあぐんでいゝる時の作品であり、この作品執筆後には翻つて終章が書かれてゐる。両者の間に密接な関係を見るのは妥当なところであろう。

また一方で、「かげろふの日記」は、福永武彦が指摘するように②発表時の前書きに「物語の女」（昭和九年十月『文芸春秋』）の三村夫人とその娘菜穂子を思わせる記載がなされており、「菜穂子」の第二部として改作された「物語の女」（昭和十六年十二月、「楡の家」第一部と改題）と「かげろふの日記」の続編「ほととぎす」

（昭和十四年二月、『文芸春秋』）に女主人公の恋愛に關して同趣旨の言葉が記されている点から、当時、堀がこれらの作品を「物語の女」の続編としての意識を持つて書いたと推測される。

三作目の「姨捨」（昭和十五年四月、『文芸春秋』）と四作目の「曠野」（昭和十六年十二月、『改造』）は、堀文学の集大成である「菜穂子」（昭和十六年三月、『中央公論』）を間に挟んで書かれており、「姨捨」「曠野」の登場人物には「菜穂子」の登場人物である菜穂子や明、圭介を想起させる言動や描写がちりばめられている。また、「曠野」執筆後に書かれた最後の小説であり、菜穂子サイクル③の一作として数えられる「ふるさとびと」（昭和十八年一月、『新潮』）も、現代小説ではあるが、「姨捨」「曠野」と同じく不幸な運命を背負わされた女性の生涯

を、やはりこの二作と同じ物語的視点で描いた作品であり、不幸なのに美しさを失わないという女主人公「おえふ」の設定は「姨捨」の草稿にある女主人公の描写といくぶん重なりを見せる。「ふるさとびと」は、主題・描写の形態から歴史小説にきわめて近いものがあるのである。

このように、堀の歴史小説は彼の現代小説と執筆時期が交錯する形で執筆されており、主題・描写における関連性が深い。よって、彼の歴史小説について考察することは歴史小説のみならず、堀文学や彼の現代小説を理解する上でも重要であろうと考えられる。

堀の歴史小説はこれまで、どのように論じられてきたであろうか。これらの作品は、堀の自作解説や随筆などから、早くから「リルケ的主題」を形象化したものとする考えが定説化し、一括して語られることも多かった。たとえば『堀辰雄事典』^③では「かげろふの日記」の項で「堀辰雄はリルケを媒介として古典に接近し、『蜻蛉日記』に『愛する女』を発見した」ことが定説化している」と記している。また、「曠野」の項では「当初から」

『つねにわれわれの生はわれわれの運命より以上のものである』というリルケの主題」が「形象化」「実現」「典型化」された「完成度の高い作品と評価されている」と記している。「姨捨」にいたっては、谷田昌平氏の「リルケ的な人生観が鮮やかに結晶」しているとの見方に対し、小久保実氏の「平凡な結婚をして静かな生活に入っていくので、リルケの『愛する女たち』ではない」という意見を提示しながらも、その結末と設定に「リルケ的な女性像は明らか」であると執筆者が締めくくっているほどである。

もちろん現在では、このような定説に対し独自の視点から作品を分析する多くの論が存在している。たとえば竹内清己氏は「曠野」をそれまでの堀の作品系列にない「詮めの女」「没我の女」を描いたものとしてそこに「一類型としての愛死の道行」^④を見ている。しかし、それらの優れた先行文献を見ても、私には彼の歴史小説がわずかな変質はあっても、やはり一貫した主題で書かれているように思えるのである。そこで、今回は「姨捨」をとりあげ、作品を分析するとともに、「曠野」を参照す

ることで堀の歴史小説を一貫するものについても考えていきたい。

なお、本稿を書くに当たっては本学教授工藤茂氏の論考「堀辰雄『姨捨』考」(別府大学紀要40、平成十年十二月)を参考にさせていただいた。

氏にはこれまで長年、様々にご教導いただいてもおり、ここに紙面をかり、感謝の意を表したい。

二 「姨捨」の女主人公の造型概観(一)

この作品についての先行論文は少ないが、優れたものが多い。特に大森郁之助^①、矢野耕三^②、吉永哲郎^③氏の論文などは資料に基づく詳細な論考で、これらの論をまとめると、堀辰雄が原典からどのように「姨捨」という作品を作り出して行ったかが一望できる。この上に論を重ねることは屋上屋を重ねるきらいもあるが、展開に即した形で作品を見ることで新たな視点を得ていきたいと考えている。

まずはじめに作品の全体を概観しておく。矢野論文^④では「更級日記」から「姨捨」が書かれる過程を削除・

脚色・加筆の三項目において論じられている。私も氏にならつてこの三分類から論を始めることとした。

矢野氏が取り上げている「削除」項目は、京に戻るまでの出来事、知人との歌のやり取り等の身辺雑事、結婚生活と夫の死後の孤独な境遇、迷い猫が自分は侍従大納言の生まれ変わりであると告白する夢以外の夢、である。おおまかにこれらの点が削除されているとまとめることについては私も異論はない。『更級日記』自体がもとと著者の半生をわずかな紙面にまとめたものであるが、堀はそれをさらに短編小説の中に閉じ込めようとした。そのためにはどうしても作品世界を限定することが必要となる。そこで堀は作品の世界を物語の舞台たりうる京都での生活に限定した。また作者を宗教にいざなう夢の記載、日常生活を省いた。これらは「物語を見ては、夢みがちに暮す」女主人公の造型を際立たせるために削除されたと容易に想像がつく。また、現在ではわかりにくくなっている和歌の贈答や物語といった身辺雑事、出仕・司召しについて書かれた記事などを削ったのは、小説としての読みやすさへの配慮であろう。

次に、矢野氏が取り上げている「脚色」項目であるが、一人称から三人称への叙法の変更、父の言葉や右大弁の言葉が、語り手によって直接描くように描かれ方が変更されていること、侍従大納言の姫、主人公の姉、夫に対する主人公の感情を書き加えたこと、主人公の心理描写（特に男車に対する関心）、四節冒頭の感懐の内容が現実に対して消極的な自分への強い不満に改められていること、作品の舞台の変更と「大きな藤」の記述である。また、「加筆」としては主人公が「女」と呼ばれるようになってからのみと限定し、常陸から戻ってきた父のやつれた姿を見た時、右大弁との出会い後、例に女の心理描写の加筆されている点と信濃下向を上げている。おむね同意である。しかし、ここにあげられた事例については、一覽してわかるように、どちらに属するものなのか分別しにくい。また、堀の意図が読みやすい反面、まとめ方によって取り上げるものの内容が変わり、どのように読むかについて個人差が生じる余地がある。そこで私は単純に分類し、考察するのではなく、具体的な作品の展開に即して加筆・脚色等の改変をまとめて論じる

ことで、私見を述べてみたい。

姨捨は全六節からなる作品であるが、五、六節がほとんど創作であるのに対し、前半は参考書や他の部分からの補足と見られる部分はあるものの、かなり原典に忠実に筋書きを追っている。その中で、一節の大きな加筆部分としては、主人公が侍従の大納言の姫がなくなったことを思い出して悲しんでいる、次のような場面があげられる。傍線部は原典に該当箇所がなく、堀の加筆部分と考えてよい。

が、さういふ云ひ知れぬ悲しみは、却つて少女の心に物語の哀れを一層沁み入らせるやうなことになつた。少女はもつと物語が見られるやうにと母を責め立ててゐた。それだけに、そのころ田舎から上がってきた一人のをばが、源氏の五十余巻を、箱入りのまま、他の物語なども添へて、贈つてよこして呉れたときの少女の喜びやうといふものは、言葉には尽くせなかつた。（中略）夕顔、浮舟、——さう云つた

自分の境界に近い、美しい女達の不しあはせな運命の中に、少女は好んで自分を見出してゐた。

原典と比較すれば、おばには直接会つて土産としてもらつてゐるなど、細かい改変はあるが、一番大きな違いは、最初の傍線部にあるように「物語の哀れを一層沁み入らせ」ていることである。原典では、継母が去り、乳母がなくなつたことで「せむ方なく思なげくに、物がたりのゆかしさもおぼえずなりぬ」と逆に物語を見たいと思ふ気持ちが薄れている。また原典では母が娘を慰めてやろうと物語を探しており、「母を責め立て」るほど苛烈な物語への渴望はない。

吉永論文⁽⁶⁾では堀はこのあたりから姉が没するまでの部分について、『更級日記』に「乳母、行成女、姉ノ死、継母ノ離別、出火ナドモ不快ナル現実トシテハ取扱ハズ、物語ノヤウナ気持デ眺メテキル」と書き込んでいると指摘している。また、堀は「姨捨記」（昭和十六年八月、「文学界」）でこのあたりについて、「その人生が一樣に灰色に見えてくれば来るほど、彼女はいいよいよ物

語に没頭し、そしてだんだん自分の身の小さな変化をもいくぶん物語めかしてでなければ見ないやうになる」という点に重点を置いて読むことにしていると、同趣のことを述べている。彼はここで、原作の枠からはみ出し気味に、物語の哀れや夕顔などの不幸せな運命にあこがれ、物語の世界におぼれる女を創作しているのである。

引用に先立つ部分で、なくなつた姫に「人知れず物語の主人公に対するやうなあくがれの心を」抱くものとして少女の心理が書き加えられていることも、先ほど述べた物語への渴望と同じくこの書き込みの解釈をより強く表現するものである。また、これに続く「いまはまだ稚なくて、容貌もよくはないが、もつと大人になつたら、（中略）さういふ女達のやうにもなれるかも知れないなどと」繰り返し考える少女の姿の点描の後、原典ですぐ後に続く「いとほかなくあさまし」という作者の反省、法華経を読めとさとす僧の夢を削除しているのも同趣向であろう。これらによつて娘の物語への憧れは前述の書き込みの方向に強調されることになる。

一節ではこの後、「互いに慰めもし、慰められもした」

姉が亡くなるまでのエピソードが書かれている。猫をめぐるエピソードでは直接話法から間接話法に変えている、原作では死んだ猫を行方知れずに行っているなど、やはり細かい改変はいろいろとあるが、大きく加筆されているのは女とその姉にかかわる次のような叙述である。夜中、話の途中で姉が出し抜けに言い出した言葉に女はおびえる。

少女はおそろしさうに顔を伏せた。幼い頃、死んだ乳母から聞かされた、女が一人きりで長いこと月に照らされると物に憑かれるなんぞと云ふ話を急に思ひだしたからだつた。姉はさういふ少女に気がつくつと、わざとらしく笑ひながら、何か外の事に云ひまぎらはせようとした。が、少女はすつかり怯え切つて、いつまでも顔を袖にしてゐた。

女は物語を現実と同一視し、「おそろしさうに顔を伏せ」「いつまでも顔を袖に」している。姉の死後の場面でも、彼女は残された姉の子を寝かしつけながら、この

夜のことを思い出して、やはり「いつまでも顔を伏せて」いる。後に書かれる「曠野」の女や芥川龍之介の「六の宮の姫君」を思わせるこのロマネスクな形象は、女の性格をよく規定しているが、原典にはない。また、この引用文に続く部分では隣家の女を訪ねて来た男の様子をうかがい、姉妹が「思はず目を見合せて、やうやく明るい微笑を交しながら」「息をつまらせて耳を敬てて」いる様子に加筆されている。そこからも女たちの物語めいたものへの関心の高さがうかがわれる。

以上、見てきたように、一節の加筆・改変は、前述の書き込みに記された方向性、すなわち、女のひたすら物語に読みふけり、現実世界の出来事にさえ物語を求め、空想の世界の中に生きているような生き様を強調するようになされている。

三 「嬢捨」の女主人公の造型（二）四

一節ではすでに述べたように少女の物語への憧れを強調するような加筆、改変がなされていた。一方、二、三、四節では女の成長に従つて彼女の心理——物語への憧れ

が変質していくことが作者によつて冒頭部で説明的に加筆されており、他の加筆・改変もそこにかかわるものが多い。吉田精一が言うように、堀は「心理の細かいくまぐまの分析と説明をつけくわえ」ており、また、そのような人物の志向に沿つた「彼女のロマネスクな心情ともっとも切実に通い合うもの」を加筆しているのである。

作者による女の心理の説明を見ていくと、「姨捨記」を見るまでもなく、この作品が女の物語世界への憧れを軸に組まれていることがわかる。そこにどのような変質が見られるのか、他の改変を参考にしながら順をおつて見ていきたい。

（前略）単調な日々の中で、少女は又昔のとほりに、物語を見ては、夢みがちに暮らしてゐた。昔風の父母は、勿論、まだこの少女を誰かにめあはせようなどとは考へもしなかつた。が、さすがに少女ももう大ぶおとなびては来てゐた。／＼（前略）女はいつか二十になつてゐた。（中略）年老いた父を一人で旅に出すのは、勿論、女には何よりもつらかつた。が、すつ

かりおとなになつた女の身としては、父と一しよにそんな田舎へ下ることも出来悪かつた。（二）

二節冒頭の一節である。二節では少女は二十に成長する。しかし、女はやはり「物語を見」て「夢見がち」に暮らしている。結婚もせず、父母に守られて屋敷の外に出ることのない彼女は現実に向き合うことはない。「何よりもつら」い父との別れにも女は父の downward 同行せず、ただ、これに続く部分で父を思つて「物語のことを忘れてしまつたやうに」山際を眺め暮らす姿で描かれているだけである。しかし、これとても物語中の人物になりきつたような姿であり、彼女が物語を忘れていないことは、この後の改変——父の無事を祈りに出かけた太秦で男車に跡をつけられ、「氣にするやうに」車を早めたことや、父の無事を祈願する祈りの途中に男車のことを思い出し、それを「逐ひ退ける」用に顔を振つて忘れようとしていくことに明らかである。原典では男車に関する記載は歌を読みかけられ、返事をしないのも悪かろうと返歌して行き過ぎるだけで、作者は七日間寺にこもる間「仏もあ

はれとききいれさせ給ひけむかし」と思うほど一心に父のことを思つて祈つてゐる。改変によつて堀が、女を現実に物語を求めろくマメスクな方向へと方向付けしてゐるのがわかる。

なお、この節には他に大きな改変として、任国前の父の言葉が大きく削られ、彼の京を出た後の手紙が直接話法に変えられてゐること、それに際し、渡り鳥の群れが点描され、同じく堀の手によつて書き加えられた、京に残つた女が見る渡り鳥の叙述との間に対応が取られてゐることがあるが、今回は論の趣旨とはなれるので詳しくは述べないこととする。

女はもう自分の運命が自分の力だけではどうしやうもなくなつて来てゐることに気がつかずにはゐられなかつた。しかし、さういふ境界の変化も、此女の胸深くに根を下ろしてゐる、昔ながらの夢だけはいささかも変へることは出来なかつた。女は自分の運命が思ひのほかにはかなく見えてくれば来るほど、一層それを頼りにし出してゐた。「かういふ少女らしい

夢を抱いたまま、埋もれてしまふのも好い」——さうさへ思つて、女は相不変、几帳のかけに、物語ばかり見ては、はためにはいかに無為な日々を送つてゐた。(三)

三節冒頭の女のこの思いも、先に見た二節冒頭の女の思いの延長線上にある。二度にわたる女の境界の変化(父の downward、父の帰還と衰弱)も、それが「相不変、几帳のかけに、物語ばかり見て」暮らせる範囲のことであれば、「昔ながらの夢だけはいささかも変へることは出来な」くて当然である。そして運命のはかなさは彼女をヒロイックな気分にするばかりなのである。女の「かういふ少女らしい夢を抱いたまま、埋もれてしまふのも好い」という感懐はそれを雄弁に物語つてゐる。

しかし、この後は少し事情が異なつてくる。彼女は周りの人々の熱心な勧めにより、女の行く末を案じた父母の手によつて宮に差し出され、變つていくことになる。そして現実にもふれた女の心境が堀の手によつてどんどん加筆されていく。この節の加筆・改変の大半は宮中に入

る次第の説明とそれなのである。

加筆・改変部分を簡単にまとめると次のようになる。

「父母の意に背いてまで、そんな宮仕へなどに出たいとも思はなかつた」彼女は出仕し、「これまで安らかな無為の中にばかり自分を見出してゐた女は、急に自分の前に何やら不安を感じながら、それでも他に為用がないように人々の云ふとほりになつて」いる。そんな彼女には宮仕へはつらく、「それが物語に描いてあるやうなものではない事は、女も承知してゐた」が、氣詰まりで、それでも「こんな具合では、一体、おれ達はどうなるのだらうなあ」と話す父の言葉に、「氣を引き立てるやうにして、宮へ上がつて往くのだつた」。

これらの加筆を一覧し、吉永論文の指摘——草稿のこの節前半にあたる部分にはもともと「三、ねざめ夢覚めて」と大きく見出しが書かれていること——とあわせ考へると、堀は三節で、女が物語の舞台である宮中に入り、その現実に触れることで、女がそれまでの夢から覚める過程を描こうとしていると考えられる。

(前略)さすがに宮仕へをした後には、女はもう世の中が自分の思つたやうなものではない事をいよいよ切実に知りだしてゐた。薫大将だの、浮舟だのが此の世にあり得よう筈がない事もわかり過ぎる位わかつて来た。が、一方、女はさういふどうにも為様のないやうな詮らめに落ち着かうとしてゐる自分が、却つて昔の自分よりもふがいなく思へてならなかつた。(四)

四節冒頭では堀の解説は右の引用のような文章になる。

傍線部が原典にはない部分で、矢野論文^⑤では「現実に対して消極的な自分に強い不満をおぼえる」主人公の姿が描かれているとされている。しかし、ここで言う「昔の自分」とはすでに見てきたやうな、物語に耽溺していた過去の自分、すなわち出仕する前の今以上に現実に対して消極的であつた頃の自分であろう。吉永論文^⑥に指摘があるように、草稿のこの部分には「物語を断念す」と書き込みがある。引用部を見ても薫や浮舟は物語の世界の象徴であるのだから、ここは物語をあきらめること

と考えねばなるまい。その上でそのことが逆に物語におぼれることよりふがいないと考えていることに注目したい。女の物語への情熱は現実の前に消されてしまったように見えるが、まだ心の奥に強く残っているのである。

これに続く加筆部分では、女は「自分だけなら、このまま静かに老いるのも好いと考へてゐた。それ程女は身も心も疲れ切つてゐた」が姪たちのことを考へて折々出仕をするようになった。「かうして此頃のやうに自分が即かず離れずの気持ちでゐられるやうになつてから、漸く宮仕へと云ふものの趣を自分でもわかりかけてきたよ
うな気もしないではなかつた」という心境に落ち着いたと語られる。

そのような心境になつてはじめて、彼女は不断経の夜に右大弁に出会う。それまで物語の中だけに存在した夢のような瞬間を実体験として体験することになるのである。堀の操作で本来この節に入るはずの結婚の記事が六節へと移動しているため、女は未婚であり、男との出会いの感興はより効果的なものとなつてゐる。

出会いの場面のあらずじは、ある女房と不断経を聞き

ていた作者のほうに「気がつかないやうに」近づいてきた殿上人が「どちらに向かつてともつかず」話したり、「真面目に問ひかけたり」して「いつまでも気もち好さうに話し込」んでいたが、「どうした訳」か十七年前の雪の夜の思い出を思い出す。そして「これからはきつとこんな真暗な、ときどき打ちしぐれてゐるやうな冬の夜のこと」折々懐かしく思い出されることだろうと語り、去つていくというものである。原作にはどの季節に心を寄せられますかとの質問に続いているものが、ここでは「どうした訳」か思い出したと単独で語られており、女に會つた夜の右大弁の感動が感じ取れるように改変されている。またこの場面では他にも右に「」で示したよ
うな細かな言葉やそれに当たるよ
うな文が加筆されているが、それは右大弁の人柄を補い、会話の不自然さを補う範囲を出ない。そして、この節は最後に次のよ
うな一文を加筆されて終えられている。

男はそんな問はず語りをしてはじめて時と少しも変らない静かな様子で、それを言ひ畢えた。／男が程

経て立ち去つた跡、女達はそのまめいめいの物思ひにふけりながら、いつまでも其処にちつと伏せていた。雨は、木の葉の上に、思い出したやうに寂しい音を立て続けてゐた。

女は、男との逢瀬に物思いにふけりながら「伏せて」いる。懂れていた物語の世界の人となりおおせて、女は一節の少女に立ち戻つた姿で描かれている。

ここまで見てきたように、四節までの作品の大きな加筆・改変は二節の父の言葉が直接心理として描かれていることを除けば、ほとんどが女の心理にかかわるものである。それは現実すら物語の一部として耽溺し夢見る乙女であつた女が、出仕し、現実に触れることで物語から覚めて行くが、心の底に物語に対する強い思いを持ち続け、ふとしたことから物語と現実が重なる機会をえてそれが再燃するという女の心の動きを見事に描きだしている。

四 「姨捨」の女主人公の造型（五、六）と作品の主題

先に述べたように、五、六節は原作の事実を追つてはいるが、内容は堀の創作・改変による部分が大きい。

五節では女の様子が次のように描かれている。

こんな事があつてからも、女が何かと里居がちに、いかにも気がなささうな折々の出仕を続けてゐた事には変りはなかつた。が、出仕している間は、いままでもよりも一層、他の女房たちのうちに詞少になつて、一人でぼんやりと物など眺めてゐるやうな事が多かつた。（中略）さうやつて宮に上つてゐても何か落ち着きを欠いている女は、里に降りて、気やすく老いた父母だけを前にしてゐる時は、一層心も空のやうにして、何か問いかけられても返事もはかばかしくしなかつたりした。さうして一向になつて何かを堪へ忍んでゐるやうな様子が、其頃から女の上には急に目立ち出してゐた。（五）

五、六節では、もはや女の内面心理は一く四節のよう

に説明としては語られず、ここに見られる「一向になつて何かを堪へ忍んでゐるやうな様子」のような外面描写の中に象徴的に語られ、解釈は読者に投げかけられている。その意味意味について考えてみよう。

引用の中略部には「何かの折にいつかの女房と一しよになりでもすると」「話もないのにいつまでもその女房の傍にゐて何か話をしてゐたさうにし」ている彼女の有様や、右大弁のことが話題になりそうになると話をそらそうとするのに「いつか」「それとはなしに聞き出してゐる彼女の有様が描かれている。そこからは女の右大弁に對する興味が読み取れる。また、引用部にあるような「詞少になつて、一人でぼんやりと物など眺めてゐる」「心も空のやうにして、何か問いかけられても返事もはかばかしくしなかつたり」する女からは恋する乙女の雰圍氣が読み取れる。男に、あるいは男との間に發展するであろう物語に彼女は心を奪われている。しかし、彼女は男との再会において親しく声をかけられながらも「なにさまで思ひ出でけむなほざりの木の葉にかけし時雨ばかりを」と一言残すだけで去っている。すでに指摘のあるよ

うに、右大弁との出会いは原作よりさらにはかないものとされ、すれ違いに終わるよう設定されている。

「姨捨」の自作解説として論のたびに引き合いに出される「姨捨記」には、更級日記の作者について、堀が「私が早い日からさういふ風に読み慣はして、いまでは私の裡にしつかりと根を下ろしてゐるこの女の心像と切り離せないものになつてしまつてゐる」読み方として次のような記載がなされており、原作よりはかない二人の出会い、そのような堀の読み方を効果的に表現するために、意図的に選ばれたものであることがわかる。

が、その逢へさうで逢へずにした利那ほど、彼女は自分がそつくりそのまま物語の中の女であるかのやうな気もちを切実に味つたことはないのだ。さういふ気持ちにさせられただけで、そのやうな一瞬間の心と心との触れ合いを感じ得られただけで、既に物語そのもののこの世には有り得ないことを知つてゐる彼女は、いかにも切ないが、一方、心の奥で一種の云ひ知れぬ満足を感じる。

引用にあるように「物語そのもののこの世には有り得ないことを」知っている彼女は、右大弁と逢瀬を重ね、物語の不在を実感してしまうことが恐いのだ。また夢を信じていたのだ。だからこそ逢えそうで逢えない際の瞬間の心のふるえに「物語の中の女」になったような気持ち、「一種の云ひ知れぬ満足」を感じて満足する。

女は、既に見てきたように改変・加筆によつて、現実すら物語の一部として耽溺し夢見る乙女として描かれていた。現実に触れることで物語から覚めた後も、それをふがいないと思うほどの苛烈さをもつて物語を愛していた。そのような彼女が物語と現実が重なる機会をえたのだから、心の奥に押し込んでいた夢見る心は激しく再燃するに違いない。

だが、一方で四節以降現実を生きてきた彼女には現実根を下ろして生きなければならぬという理知も働く。この時点では彼女を現実を引き戻す要素は、先に書かれた「自分だけなら、このまま静かに老いるのも好い」と思いつつも出仕を続ける原因となつた甥たち、頼りなく

なつた親のことだけでもなくなつてゐるだろう。

女は無意識のうちに夢を見たいという希求と現実に足を下ろそうとする理知との間で葛藤に苦しむ。それが右大弁とあつてからの彼女の「一向になつて何かを堪へ忍んでゐるやうな様子」ではなかつたのか。彼女の様子は、六節では結婚を経て「いよいよ誰の目にも明らかになるばかりだつた」とされている。結婚すれば右大弁との物語は諦めねばなるまい。しかし一方で女の再燃した物語への情熱は抑えることが出来ないから、彼女の葛藤は強くなり、「誰の目にも明らか」にまでなるのだと考えるところでもつじつまが合う。

大森氏はこの形象を「現になろうとしてゐるかのような(夢)に、心を奪われまいとする思い、(夢)を(夢)として思い捨てる苦しみ」からくるものと断じている。⁸⁾ 言い得て妙である。しかし、この表現では、その思いや苦しみの裏に、彼女のかわることない(夢)への情熱があることを見落としがちである。あえてその点を強調しておく。

六節で女は、「二十も年上の」「氣立の優しい」「何もかも女の意をかなへてやらう」という氣持ちの見える「悪い氣はしな」い男の妻となる（これは年齢・時期の点で「更級日記」の事実と異なる）。が、女の「一向になつて何かを堪へ忍んでゐるやうな様子」は明らかに、女は「をりをり思ひ出し笑ひのやうな寂しい笑ひ」を浮かべる。夫は堀好みのいい人だが、彼女が現在の結婚生活に満足していないことは明らかで、「思ひ出し笑ひのやうな寂しい笑ひ」という表現からは、現在の生活を「寂しい」ものと観じていることが読み取れる。

しかし、彼女は「何か意を決したことのあるやうに」父母の懇願を振り切つて夫とともに下向する。これは作品最大の改変であり、ここにはさまざまな見解が存在する。夫と同行させることに女に対する堀の愛情を見たり、行き先である信濃に救拔を見出したり、その後の静かな平凡な生活を想像して堀は不幸な女に幸福を与えたとみたり、解釈はさまざまである。その解釈の中にあつて特に注目すべきは大森氏の次の発言^⑧であろう。

（堀の「嫉捨」）は、ここで本文を閉じる。信濃国に移つた後の女主人公と夫との生涯は、本文の向こうに、締めだされる。ということを見点を變えて云えば（中略）素材事実を、その存在までも、いわば先取りして否定してしまつたわけではない、ということでもある。堀自らの作品において事実の進行がそのことに迄及ぶ以前に、別の筋書を挿入し、挿入した所で自分の表現を打切つた、というだけのことである。

氏がいうように、この後「嫉捨」の女は決して幸せになるわけではない。多くの論者や堀自身が述べているように、更級日記の作者も晩年は幸福ではなかつたらしい。また、それを知らずとも、この小説は「わが心なぐさめかねつ」の題詞で始まつており、そこに見られる暗い情念は、彼女のそれからが決して幸福ではなかつたことを示している。しかし、先に述べた解釈に見られるように、われわれはうっかりしがちなのである。それは氏の言う「別の筋書」が小説の末尾に示されているからである。

ある晩秋の日、女は夫に従つて、さすがに父母に心を残して目に涙を溜めながら、京を離れて往つた。幼い頃多くの夢を小さい胸に懐いて東から上つて来たことのある逢坂の山を、女は二十年後に再び越えて往つた。「私の生涯はそれでも決してむなしくはなかつた——」女はそんな具合に目を輝かせながら、ときどき京のほうを振り向いてゐた。

これがその「別の筋書」、この作品末尾の女主人公の形象である。

矢野氏はその論文⁽⁵⁾で、堀がこの作品で「主人公が物語を読んでいく中で理想の世界として作り上げてられた『夢』を現実の相克の中で鍛えていく主人公の姿を作品として描いて」といふと、この形象について次のように述べる。

「夢」を現実逃避の道具とし、現実に対して受動的な態度をとり続けてきた主人公は、信濃へ下ること

とで、「夢」を現実に対して向き合つていくための糧とし、作品の結末で「私の生涯はそれでも決してむなしくはなかつた」と「目を輝かせながら」京のほうに振り向ける女性となつていた。

信濃に下る前の女の描写を、信濃に下ることで変わつていくと予想される態度から推測しているように書かれていて、わかりにくい文面になっているが、非常に示唆的な文章である。

女が現実逃避、受動的な態度でのみ生きてきたなら「私の生涯はそれでも決してむなしくはなかつた」といふ思いを持てるだろうか。彼女の言葉にはそのような生き方では生じ得ない強さがある。それはどこから来るのか。

この作品では矢野氏が言うように「夢」を現実の中で鍛えていく姿が読み取れた。ただ物語の世界を思慕するに終わったのでない。夢を忘れて現実に埋没したわけでもない。特に四節以降、女は夢を糧としつつ現実に足をすえてそれと向き合つて生きていた。空しくなかつたと

いう自負はここから来るのではないか。本文の言葉で、草稿の「私の生涯は空しかつたのだらうか／そんなにわからないほどすてた人生だったのだらうか」に、同じく本文の「目を輝かせながら」という形象を、草稿の「物語の／中に出てきさうな小家など」を「何か胸を一ぱいにしながら」見つつ去っていく形象と比べてみると、そこには明らかに違いがある。草稿の表現を物語への思慕の中にのみ生きた女性の悔恨、夢を得られなかつた悲しみだとすると、本文の表現にはたとえそれがみだされないうものであつても、現実を精一杯生きた女の自負と明日への明るい意志が見られ、未来への希望が感じ取れる。これこそが堀がこの作品で描こうとしたものではなかつたか。数々の改変・加筆が女性の心理描写に集中し、これまで述べてきたような女性像を作り上げていくこと、そして最後を前述の「別の筋書」の女の形象でしめくくっていることから私はそう結論するのである。

堀はこの後「更級日記」の作者が幸福にならないことを知っていた。この後を続けて描けば、ここに示した女の自負と希望を否定、あるいは弱めることになつてしま

う。題詞をつけ、「姨捨」という題をつけることで女に行く末を暗示したことは、そうならないための回避策ではなかつたか。もちろん、信濃下向という改変をやつてのけた堀であれば、下向後の女を幸福に描くことは可能で、そうしてやりたいような女への愛情は「姨捨記」などから読み取れるのだが、彼はそうしなかつた。それは、たとえ自負と意志があつても、それだけで幸福になれるわけではないという、作家の冷徹な人間認識であつたらうか。

五 「姨捨」と「曠野」く失われなかつた貴種流離譚く
歴史小説の第三作である「姨捨」と第四作の「曠野」にはかなりの共通点がある。「姨捨」が「物語」に対する女の気持ちを軸に構成されていたのと同様に、「曠野」では「待つこと」が軸となつて作品が構成されている。曠野は全四節の小説であるが、その一節で女は男のために思つて別れを告げる。しかし、その後も女は待ち続ける姿を書き続けられる。

①それでも女はなほ男を心待ちにしながら（中略）暮らしを続けてゐた

②なれば傾いた西の対の端に、わづかに雨露をしのぎながら、女はそれでもちつと何者かを待ち続けている

③それでもなほ女はそこを離れずに、何者かを待ち続けているのをやめなかつた。

「あの方さへお為合せになつてゐて下されば、私は此の儘朽ちてもいい」

①から③へと現実が厳しくなればなるほど「待つこと」に満足を見出していくこの姿は、「姨捨」の女が現実が厳しくなればなるほど「物語」に頼つていくのと同様の展開であり、③のヒロイックな思いは出仕して現実を知る前の「かういふ少女らしい夢を抱いたまま、埋もれてしまふのも好い」という「姨捨」の女の思いに共通するものがある。

二節では女は男の訪問を受け、現実には男と暮らすことが夢であつたことに気づいて「すべては失はれてしまつ

た」と待つことを断念する。そして三節で郡司の息子に身を任せ、「自分の余りにもつたなかつた来し方に抗ふやうな、さうして何か自分の運を試してみるやうな心持にもなりながら、」男とともに近江に下向するのである。沈む気持ちを奮い立たせて生きようとするこの姿勢も、気詰まりな宮仕えの中、現実には物語などありはしないと知りつつも、父のことなどを思つて「気を引き立てるやうにして、宮へ上がつて」行く「姨捨」の女の姿にある程度重なつてくる。

下向後の女については男の裏切りを経て次のように書かれる

が、一月たち二月たちしてゐるうちに、（中略）空虚な気もちのする日々が過ぎされた。いままでの不為合せな来しかたが自分にさへ忘れ去られてゐるやうな、——さうして、そこには、自分が横切つてきた境涯だけが、野分のあとの、うら枯れた、みどころのない、曠野のやうにしらじらと残つてゐるばかりであつた。「いつそもうかうして婢として誰にも

知られずに一生を終へたい」——女はいつかさうも
考えるやうになつた。

この心境は「嬢捨」の題詞となつてゐる「さらしなや」
の和歌の世界とやはり共通する。また最後の女の感懐は
「自分だけなら、このまま静かに老いるのも好いと考へ
てゐた、それ程女は身も心も疲れ切つてゐた」と描かれ
る「嬢捨」の女と感懐と等質のものである。両作品は、
「物語」・「待つこと」に耽溺する充実感（しだいにき
びしくなる現実とそれに比例して強くなる思い）↓ 現
実の認識と失意 ↓ 現実への抵抗 ↓ 絶望・悔恨と
いう道筋をたどり推移する女の生涯を描いている点で一
致する。

このような女たちに堀は同情的であつた。「嬢捨」で
は、男に「何かこう物語めいた気分の中に引き摩られて
行くやうな、胸のしめつけられるほどの好い心もち」を
感じ、「もう一度で好いから、あの女と二人ぎりでしめ
やかな物語がして見たい」と思わせてゐるし、「曠野」で
はやはり男に「この女ほど自分に近い、これほど貴重

なものはないのだ」「この女こそこの世でめぐりあふこ
との出来た唯一の為合せ」と思わせてゐる。しかし、そ
の一方で堀は二人の運命を不幸の中に閉じる。「嬢捨」で
は「嬢捨」の地名と「さらしなや」の歌の持つ暗い情念
の中へ。曠野では「死」の世界へ。

堀は一つの類型として、このような女のありようを認
識していたといえよう。堀にこのように類型的な作品を
書かせたものは何なのか。ここで少し作品を離れて考え
てみたい。

堀の自作解説「嬢捨記」（昭和十六年八月、「文学界」）
の中で、堀は更級日記を読む中で突然一人の古い日本の
女の姿がひとつの鮮やかな心像として浮かんできた
という。そして次のように語る。

それは私にとつては大切な一瞬であつた。その鮮
やかな心像は私に、他のいかなるものにもまして、
日本の女の誰でもがほとんど宿命的にもつてゐる夢
の純粹さ、其の夢を夢と知つてしかもなほ夢みつつ、

最初から詮めの姿態をとつて人生を受け容れようとする、その生き方の素直さといふものを教えてくれたのである。

ここで堀は「日本の女の誰でもが」とこの作品のテーマが誰にでも起こりうることを指摘している。また、題詞の歌——わが心なくさめかねつさらしなやをばすて山にてる月をみて——を取り上げた理由について語る部分にも次のような表現が見える。

この古歌は、私には、どうしても自分の作品の女主人公とほぼ似たやうな境遇にあつた女が、それよりもずつと遠い昔に人知れず詠んだもののやうな気がしてならない。(中略)さういふ境遇の女が自分の宿命的な悲しみを懐いた儘いつかそれすら忘れ去つたやうに見えてゐるが、ある月の好い夜にそれをゆくりなくも思ひ出し、どうしやうもないやうな気持ちにさせられてゐる時におのずから詠み出したものとして、それを考へて、一番私の心にそのなつかし

さの覚えられる歌である。

ここでも堀は自分の作品の女主人公とそれ以前の女性に共通する思いとしてこの歌を取り上げ、通時的にもそれが誰にでも起こりうることであることを暗示している。また、この文章で堀は古歌中にある「宿命的な悲しみ」と「どうしやうもないやうな気もち」に焦点を当てている。この歌が決して孤独や棄老伝説を想起するものとして使われたのではなく、「わが心なくさめかねつ」の部分に焦点を当てられたものだとわかる。これに続く部分で堀は「遂にまったく孤独となつた自分の身の上を『をばすて』と観じ、そのような感慨を」「託してゐる」更級日記の和歌よりも、「この古歌そのものをこそ彼女に口づさませたいやうな気がしてならなかつた」と述べており、題詞とタイトルに対する堀の気持ちから読み取れる「姨捨」は厳しい運命を生き抜いた女性の運命的な悲しみ、あるいはそのやるせなさである。これは既に見てきた「姨捨」「曠野」の女の形象に重なるのみならず、「大和路・信濃路」の百済観音について書かれる一節や、次

の「若菜の巻など」（昭和十五年八月、『創元』）の光源氏についてかかれる一節などと共通しており、この時期の堀がこうした主題に興味を持ち続けていたことがわかる。

——本当のトラチティといふものは本当に崇高な人物が、運命の抵抗に遭って、さまざまな苦しみをしつつ、その生涯の何処かに人知れぬ涙の痕をにじませながらも、しかもその生得の崇高さを少しも失はずに、最後まで生き抜く、——そういったものではないでせうか。

堀はこれに続く箇所でこのような「ドラチックな」古代人は源氏物語以前にもプロトタイプを見出しうるのではないかとし、鎌倉以降「優れた人間の典型」が失われた事を惜しんでいる。

堀がいうように「姨捨」の女のような生き方が今も「日本の女の誰でもが」持つもので、それが時代をこえ女性に共通するものであれば、それは光源氏のようなト

ラジックな古代人の典型と異なり、まだ失われず歴史の中に連綿と続いている、一つの典型だと考えてもよからう。既に多くの論者が指摘している「男」「女」として固有名詞を使わないことも、そうした類型化を容易にしている。ならば、乱暴な言い方だが、それは現代の女性にも継承されるのではないか。

福永武彦は前述の論文で、『ひどい運命を背負はされた女』を書くことは、必ずしも堀が古典から探し出したモチイフではなく、現実から見出して、逆に想像力によつて古典に当てはめようと考へたモチイフである」と言う。そして、そのモデルとして、『物語の女』である三村夫人と『風立ちぬ』の節子を上げている。しかし、『ひどい運命を背負はされた女』を何もこの二人に限る必要はあるまい。戦争へと進む時代の中で彼のまわりでもさまざまな悲劇が起きていただろうし、その中で三村夫人や節子と違う、重い運命の中を夢を糧に強く生きている女性たち——第三の類型的モデルがいたとしても不思議ではない。たとえ、そのような存在がいなくとも、堀が日本人女性をそのように理解していたのであれば、「曠

野「姨捨」を描くことは、当時の女性たちに運命に負けて自らを見失うことなく強く生きよというメッセーじたりえた^⑩だろう。

堀は「旧友への手紙」^⑪の中で、「いつかまた、さまざまに見知らぬ他人との対話だとか、他人の悲劇への参加（けれどもそれらの差し出がましい助言者にも、冷ややかな目撃者にもなりたくはない。ただその傍らにちつとしてゐて、それだけでもつて不幸な人々への何かの力づけになつてゐるやうな者になつてゐたい……）だとかの後に、さういうもつと静かな、もつと力と諦めに満ちたモノローグに帰つていくかもしれない」といつてゐる。この小説の執筆はそういった堀の「他人の悲劇への参加」であり、「力と諦めに満ちたモノローグ」ではなかつた^⑫だろうか。

注

(1) 昭和十一年十二月『改造』に「序曲」「風立ちぬ」、昭和十二年一月『文芸春秋』に「冬」、三月『新女苑』に「婚約」、昭和十三年三月『新潮』に終

章「死のかげの谷」を発表

(2) 福永武彦「堀辰雄の作品」

ただし『日本文学研究資料叢書 堀辰雄』（昭和四十六年八月、有精堂）による

(3) 『堀辰雄辞典』 竹内清己編、勉誠出版、平成十三年十一月

(4) 大森郁之助『姨捨』での救拔——粗描・堀辰雄の世界——

ただし『堀辰雄の世界』（昭和四十七年十一月、桜楓社）による

(5) 矢野耕三「堀辰雄『姨捨』論——『更級日記』との比較を通じて」

『國學院大學大学院文学研究科論集』、平成十二年三月

(6) 吉永哲郎『姨捨』の創作過程をめぐつて——新資料・書き込み本と草稿を中心に——

『国語と国文学』、平成五年六月

(7) 吉田精一「堀辰雄と王朝小説」、至文堂版『現代文学と古典』、昭和三十六年十月、

ただし、『日本文学研究資料叢書 堀辰雄』による

(8) 大森郁之助「信濃へ往く婦——堀辰雄の方法につ

いての序章」、札幌大学教養部・札幌大学女子短期大学部紀要一号、昭和四十三年十二月

(9) 日本近代文学会九州支部秋季大会にて熊本大学の

谷口絹枝氏に窪川（佐多）稲子とその作品「くれない」にそうした傾向のあることをご教示いただいた。今回はそこまで論をのべることが出来なかったので今後の課題にさせていただきたい。

(10) 時が離れるが、堀は『古代感愛集』読後（昭和二

十三年九月、『表現』）の中で「一つの『物語』が単なる一つの『物語』であるだけでなく、それが『人間性』についても、それと同時に『国民性』についても、深く教へるところのものであらせたいと思ひます」と述べている。「姨捨」や「曠野」は、人間性や自我性を失いつつあった時代に対する堀の抵抗であったのかもしれないと考えている。

(11) 昭和十四年十二月、「文芸」。

後に改題して

「悲しかれ、美しかれ——窪川稲子さんに——」、

(本学助教授)